

第 7 4 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

令和2年5月20日 日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	シビックセンター <まほろばテラス>	大橋 董	大阪芸術大学 建築学科	8
2	湊川 LANDSCAPE CINEMA ー都市公園と融合する映画体験の場ー	檀野 航	神戸大学 建築学科	12
3	島と堤ー堤防沿い集落における土手の拡張による堤再考計画ー	尾石 光	近畿大学 建築学科	6
4	藍を纏う	黒田 茉佑	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	3
5	点と点が線になるまで	堀上 薫乃	奈良女子大学 住環境学科	8
6	新しい小劇場のあり方 ー芝居の町「道頓堀」の再構築ー	矢田 萌夏	武庫川女子大学 生活環境学科	5
7	INDUST:RE ～Regeneration of a Industrial District～	久保 良太	大阪工業大学 建築学科	11
8	What is this thing called Architecture ～architecture→Architecture～	滝口 大貴	関西学院大学 都市政策学科	1
9	沖繩再考 川と生きる商店街	大友 沙弥	京都工芸繊維大学 デザイン建築学課程	11
10	都市を編む	白石 晃	京都府立大学 環境デザイン学科	8
11	土の記憶 ー陶の生業から生まれる信楽の景観デザイナーー	幡野 遥	立命館大学 建築都市デザイン学科	3
12	地域の記憶の居場所	藤澤 忍	滋賀県立大学 環境建築デザイン学科	6
13	万物流転 ー変容するコミュニケーションのかたちー	西丸 美愛子	大阪大学 地球総合工学科	6
14	記憶の継承地 陸上自衛隊桂駐屯地整備計画	吉岡 真樹	京都美術工芸大学 建築学科	6
15	ただいまが言える場所 ～地域の児童福祉施設の提案～	松浦 紅音	兵庫県立大学 環境人間学科	6
16	歩いて暮らせるむら	木下 広香	京都精華大学 建築学科	9
17	SoundCaveUmekita ー都市に穴をあけるー	白神 隆介	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	7
18	OBJECTーEVENT	石川 真一郎	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	4
19	Re OTSUー大津城址を活用した大津港湾エリアの再生計画ー	羽鳥 咲和	京都女子大学 生活造形学科	5
20	市街地と過疎集落を結びつける健康増進施設	三木 有沙	大阪市立大学 居住環境学科	10
21	ほとぼりの流転	中上 和哉	関西大学 建築学科	9
22	川と人の風土史	中山 賢司	京都芸術大学 環境デザイン学科	7
23	街の匂い土の薫りー京都山科半都半農計画ー	高山 夏奈	京都大学 建築学科	3
24	郷の継承ー非居住住宅「郷家」の改修による集落再生起点の提案ー	佐藤 孝志	和歌山大学 システム工学科	8
25	空移現の建築ー堺環濠都市北部における町家保存と都市再生の提案ー	名富 心	摂南大学 住環境デザイン学科	10
26	山麓の堰堤ー土砂災害の教訓に学ぶフィールドミュージアムー	向上 沙希	神戸大学 建築学科	9
27	塔がいざなう劇場空間 ー移動することで変化する景観	中岡 瑞貴	武庫川女子大学 建築学科	11
28	休閑地にて	津熊 春樹	大阪工業大学 空間デザイン学科	6
29	半屋外空間のインタラクション	小野 晶実	京都工芸繊維大学 デザイン建築学科	7
30	奥大野集落都市移転計画	濱田 優人	大阪市立大学 建築学科	6
31	断片に宿る懐かしさ	渡部 泰宗	摂南大学 建築学科	10

(受付順) 以上31点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
令和元年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第74回）審査報告

審査員長 中村 文紀

令和2年5月20日（水） 審査会場：Web会議システムを利用

審査員長（互選） 中村 文紀
審査員（50音順） 臼井 明夫・近藤 努・坂本 昭・須賀 定邦・牧野 雅一・森 雅章
応募作品 31点（別紙参照）

審査経緯

新型コロナウイルス感染防止の対策として、本年度はWEBによる遠隔審査会となった。審査員は、例年通りの設計事務所、ゼネコン設計部所属の7名で構成され、全員が初めて体験する審査環境であったが、対話を通じた丁寧な審査を心掛け、応募31作品から入選3作品を選出した。作品は、あらかじめ電子データとして各審査員に届けられ、各自、事前に内容を読み込み、審査会に臨んだ。しかしながら、作品は実物が審査されることを前提に作成されたものであり、電子データ化されることにより、大半の作品が、やや明瞭度を欠き、応募者が意図したであろう量感や色彩などは少なからず、失われてしまったことは残念であった。実物を想像しながら、モニターに映る画像を丹念に審査したつもりであるが、作品に込められた想いを十分には読み取れたかどうかには疑問が残る。経緯を振り返っても、このことが、最後まで票が割れた動因のひとつとなったのではないだろうか。審査会時点の難しい社会状況に鑑みて、ご容赦いただきたいところである。

1次審査は、各自6作品に投票することとした。4票が1作品、3票が5作品、2票が7作品、1票が9作品となった。得票のなかった作品を除く22作品について、提出物の体裁の確認、またデータ化により損なわれてしまった部分の考慮など行いながら、1作品ずつ協議を行った。4票を獲得した1作品の入選を決定し、2次審査対象10作品を選出した。

2次審査は、この10作品に対して、各自3作品に投票を行った。4票が1作品、3.5票が1作品、3票が2作品、2票が1作品、1票が3作品となった。小数点以下のある票数となったのは、3名の審査員から、2作品は1票を投じられるが、あと1作品はやや差があるというニュアンスを込めたいという申し出があり、この3名の残り1票をそれぞれ0.5票として集計した結果である。得票のなかった作品を除く8作品について、問いのたて方の清新性や計画された建築ボリュームの妥当性など、広範にわたる協議を行い、上位4作品を選出した。

3次審査は、各自2作品に投票を行った。5票が1作品、4票が1作品、3票が1作品、2票が1作品となった。得票数の多い順で2作品の入選を決定した。

（中村）

審査概評

今年度の応募作品は全31作品、いずれも力が入った佳作であった。

提案する学生が本人の問題意識をベースに自由に課題を設定し、計画地やテーマを設定していく。これは卒業設計ならではあるが、提起されたテーマは、現実の社会や環境、都市、建築に対する疑問からサイバー空間に至るまで多種多様であった。テーマに対する解の導き方にも、綿密な調査を積み上げた作品から、新たな発想力を原動力に作品として纏め上げたものまで、提案の導き方にも様々な個性が表れていた。

審査に当たっては、提起されたテーマの妥当性、今日性。テーマに対する建築的な提案力、展開力。これらを表現するプレゼンテーション力。それらに共通する斬新な切り口など、多角的に議論しながら数回の投票により絞り込んでいった。

いずれの作品にも光る側面があったが、テーマの提起に留まるもの、一定の提案に至っているものの表現力不足により伝わりにくいもの、テーマと提案の関係が弱いもの、等も多くみられ、総合的に審査員を唸らせる作品は少なかった印象である。

その中でも、特に高い評価を得るに至った入選3作品には、案を特徴づける秀逸な側面があり、審査する側にも新鮮な驚きを与えてくれる提案であった。

(近藤)

島と堤 ー堤防沿い集落における土手の拡張による堤再考計画ー

尾石 光君 (近畿大学)

本提案の計画地は新高瀬川と濠川に挟まれた敷地であり、かつて伏見城の外濠(現在は濠川)として作られた淀堤とそれに沿った集落、その背後にある埋め立て地を対象としている。

計画の問題提起として堤防の決壊と越水による内水氾濫を挙げ、設計では土手から集落背後の埋立地までの連続した空隙にうまく着目し、川の水と植栽を引き込む仕掛けが施されている。増水した水を引き込むことによって災害を緩衝しながら、ランドスケープ的に緑と水の風景を作りだしている点も評価できる。また、引き込んだ水の変動により、住民に川の増水を知らせる仕組みも上手く機能していると言える。

住民主体の園芸的行為が誘発されて緑と水の風景が広がっていくビジョンが見え、時間の経過や天気の変動によって水たまりの形や量、草花や樹木の表情が変化し、様々な憩いの場が形成されていくだろう。

本提案の評価点は、実現可能を思わせるリアリティを持ったランドスケープの提案である。大きな計画の中で、地形の操作や植栽の施し方、水の流れや量の操作、それらと関わり合う道や階段、ブリッジなど身体的なランドスケープが展開される可能性が浮かぶ。

最後に、本提案はよりランドスケープと関わり合う景観としての建築的な操作には改善の余地があり、建築とランドスケープが絡み合っって新たな風景を作り出せれば、更に良くなると思う。

(坂本)

土の記憶 —陶の生業から生まれる信楽の景観デザイン—

幡野 遥君 (立命館大学)

日本六古窯のひとつとして知られる信楽における「景観デザイン」の提案である。陶土の採取のために掘り起こされた空間を活用し、リサイクル機能を付加した窯業試験所と、窯元散策する観光客のための見学施設を併設した建築を計画している。

登り窯を想起させる造形を、周辺の街区に合わせたボリュームで配置し、信楽の風景に馴染ませている。変化に富んだ立体的な空間構成は、思わず歩いてみたくなる。周辺に自生するアカマツを薪として活用する「登り窯」や、豊かな生態系を育む「ため池」を合わせて計画することで、「里山の再生」や「水生植物の定着」を目指している点は共感できる。

計画そのものは、現実的なプログラムの設定であり、計画規模も必要最小限である。奇をてらわず、やきもので使う土を通して、建築を組み立て、信楽のあるべき姿を時間軸とともにストーリー立てている。歴史・風土・地勢などを読み込んだうえで、まちが抱える課題を丁寧に分析し、町医者的に解決を試みようとしたプロセスを評価したい。

(森)

山麓の堰堤 —土砂災害の教訓に学ぶフィールドミュージアム—

向上 沙希君 (神戸大学)

身近な社会問題(豪雨災害)を題材に、的確な敷地(六甲山)を選択し、伸びやかな造形にまとめ上げた、爽やかな秀作である。

まず「堰堤は通常、土砂災害後の防災対策として無味乾燥な土木構築物として構築されるが、満砂した後はその土砂が浚渫しゅんせつされることなく放置され忘れ去られるケースが過半」という問題提起がなされる。それに対して本提案は「定期的な浚渫を可能とすることで、堰堤としての機能を継続的に維持し次の災害に備えつつ、現地現物での防災啓蒙学習の機会を提供し、土砂災害が起こる場のポテンシャル(敷地レベル差・開けた景観・豊かな自然)を最大限生かした市民の憩いの場」とする新しい砂防堰堤の在り方を提示する。

ここまでで十分とも言えるが、作者の更なる飛躍の為に一言付け加えさせて頂きたい。浚渫の仕組み、土壌や植栽と水害の関係、広域防災(施設連携の可能性)、自然エネルギー利用といった新たなパラメータ群を取り込むことで、建築/土木/空間は更に豊かさと強度を増すのではないか? わずか一世紀ほど前に禿山であった六甲山を現在の緑あふれる姿に変えた先人の遺志を継ぎ、未来へ繋ぐのは若者の構想力と意志に他ならない。

(須賀)